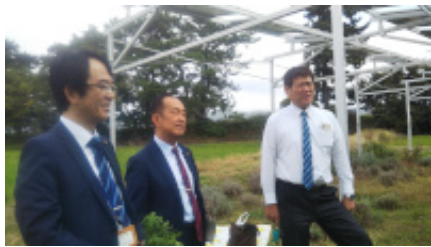


農業の再生と太陽光発電をどうやって

視察報告の2回目は、小田原市で
営農型太陽光発電に取り組んでいる
「かなごてファーム」です。

耕作放棄地で 太陽光発電を



かなごてファームは、耕作放棄地でミカンを栽培し、「おひるねみかん」のブランド名で、みかんジュースをつくっていた団体です。

新たに始めたのが、耕作放棄地に太陽光パネルを設置して発電し、太陽光パネルの下で農産物を生産する「営農型太陽発電」です。

最初に見学したのはソーラーシェアリングの3号機「金次郎の里」(小田原は二宮金次郎の生誕地)です。ソーラーパネルの下で、市民グループのみなさんがハッカの収穫



をしていました。北海道の滝上町に学び、ハッカ油を抽出しています。3号機では、無償で市民に農地を貸し出し、7、8グループ、20名ぐらいの市民が農業を始めました。

パネルの下にきちんと太陽光が降りそぐように、パネルは隙間をとって配置されています。しかも猛暑の時には適度な日陰にも。

この電気はかなごてファームが経営する農家カフェ・シエスタや公共施設で自家消費され、さらにF-1Tによらずに売電しています。

みかんジュースや清酒に5号機では、太陽光パネルの下で、みかんの生産をしています。また、



農家カフェ・シエスタ

太陽光パネルの下で、水稻の生産をしている所もあります。この水稻は



「主食用のおコメ」なのですが、あえて日本酒に加工、「推奨」という名前で出荷しています。みかんジュースも清酒造りも、専門の業者に委託しての生産です。

現在建設中の7号機では、さらに規模の大きな水稻栽培を予定しています。

地域が主体こそ本来の姿

この事業で「そうだな」と確信になったのは、農作物の生産だけでは赤字になりかねない農業を、太陽光発電で売電収入で採算のとれる事業にしたことです。だから耕作放棄地を再び農地として再生させることができます。

田植えや収穫ボランティア、市民グループによる新たな作付けなど、市民の共同、コミュニティづくり

が進み、それが脱炭素化の大きな力になったことも副産物です。

脱炭素先行地域として国から認定を受けた小田原市は、補助金などで営農型太陽光発電を後押ししています。売電単価が低下する中で、建設費の半分を市が補助していることが、この事業の支えになっています。

メガソーラーとは対極

かなごてファームの代表は、メガソーラーにはきっぱり反対と言います。自然から収奪し地元利益をもたらないメガソーラーとは対極の事業だからです。

松田町は、かなごてファームと一緒に営農型太陽光発電に取り組みつつ、「太陽光は地域固有の資源であり、これを享受するのは地域住民の権利。外来の資本が勝手に利用することは歓迎しない」との理念を盛り込んだ再エネ条例をつくりました。